

人文学的パースペクティブから パンデミック下のケアと民主主義の危機を読む

早坂 静

はじめに

私たちは21世紀に向けて、自分たちの文明と、自分たちにつながる人間の身体について、それをいつくしみ、よく保ち、発展させ、望むべくは改良して、あるいはすくなくとも壊さず、そのままに、われわれの後にくるべき者らに渡すようにと、そのことを願って生き、そのことを願って考えようとしているのではないのでしょうか？

医療する方たちの想像力、イメージーションは、また癒されるもの、私どもの想像力は、このように自分らの生きる惑星の文明と環境を、未来に向けて考えるということを行います。そしてそれは具体的に、人間の身体について、私たちひとりひとりの身体と、そして新しくやってくるものたちの身体について考えているということではないのでしょうか？（大江「癒される者」33）

文明と人間の身体について、「同じひとつのものとして考え、思いやり、希望を託す、そのために力を尽くすということ」（大江「癒される者」33）こそが、医療をする人たちの想像力であり、それはまた、人間が持つべき性質のなかで最も肝要なものなのではないか、と大江健三郎は1994年に開催された国際医療フォーラムでの演説の中で示唆した。本年（2023年）3月に逝去した大江は執筆活動を通して、1994年のノーベル賞受賞記念講演の「あいまいな日本の私」^{アムビギュアス}で述べたように、20世紀がテクノロジーと交通の「怪物的な」発展のうちに積み重ねた被害を受けとめ、そこから展望しうる、「人類の全体の癒しと和解に、どのようにディーセントかつユマニスト的な貢献がなしうるか」^{アムビギュアス}（大江「あいまいな日本の私」17）を一貫して探り続けた。また、障害のある長男光さんと共生することを、大江はその人生と文

学を中心に据え、普遍的に求められる社会的弱者への配慮、支援や慈しみや、守られるべき人間の尊厳について、核時代を生きる日本人として表現し続けた。

大江のこうした人間観と文学観を共有したのは、第2次世界大戦でドレスデン空爆の被害にあった経験を持つ、米国の小説家カート・ヴォネガットであった。ヴォネガットは、1945年、第2次世界大戦中に陸軍兵士としてドイツの前線地帯に赴いたが、赴任後すぐに敵軍の捕虜となり、ドレスデンの戦争捕虜収容所に送られた。ドレスデンの街は、ヴォネガットが収容所に連行された翌月には連合国軍による大空襲を受け、彼は瀕死の危機に陥りながらも辛うじて生き延びる。ヴォネガットの平和主義の根底には、第2次大戦中のドレスデンにて夥しい数の人々が、軍事テクノロジーを用いて命を奪われ、破壊されてしまうのを目の当たりにしたという経験がある。大江健三郎は、1984年に行われたヴォネガットとの対談の中で、「ヴォネガットさんは、実際に、例えば平和のために、あるいは核兵器廃絶のために、あるいはテクノロジーによって人間が破壊されてしまわないために、具体的に抗議の声を挙げる人だということです」（ヴォネガット、大江「テクノロジー文明と『無垢（イノセンス）』の精神（対談）」73）と、ヴォネガットの平和に対する姿勢を称えている。

COVID-19、ヒポクラテスの誓い、ヴォネガット

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）は、2019年末から2020年前半にかけて、有効な治療法が見つからないまま、急速に世界各国に感染拡大した。2019年12月末の中国における最初の症例報告から2ヶ月後には、53ヶ国に感染が拡大し、全世界で3000人を超える死亡者が確認された。このような中で、感染拡大を防ごうと、住民の行動を制限し、中には、必要不可欠な外出を除いた移動を厳しく禁止するロックダウン（都市封鎖）や、プライバシーに踏み込んだ感染経路の追跡調査やマスク着用義務化などを行う国々も複数あった。その後も感染は拡大し続け、2023年の5月の時点で、世界中で、死者は700万人近くに達した。世界保健機関（WHO）のテドロス事務局長は、本年（2023年）5月5日、3年3ヶ月に及んだ「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態」の終了を宣言した。テドロスは緊急事態開始から3年経過し、ワクチン接種や感染により集団免疫が高まり、COVID-19による致死率が下がり、医療システムへの負荷が減少してきたことを緊急事態終了の理由であるとした。

本稿では、米国において見られた COVID-19 の感染拡大への対応をめぐる論争の諸相をカート・ヴォネガットや W・E・B・デュボイスらアフリカ系アメリカ人の指導者らの思想と関連付けることを通して捉えていく。アメリカ文学研究の視座から、アメリカにおけるコロナ禍をめぐる論争がいかなるものであったか分析することを試みる。

ヴォネガットはマサチューセッツ工科大学（MIT）における講演の中で、科学者が決して人間を傷つけるためにその技術を用いることはしないという強い倫理感を守るようにしなければ、科学技術の力は人間の尊厳を蹂躪し、その命や生活、健康を破壊する可能性のあるものであると警鐘を鳴らした⁽¹⁾。科学技術が進歩し、機械による効率化が進む中で、人間の尊厳が失われることに危機感を示したヴォネガットは、紀元前 4 世紀の「医学の父」ヒポクラテスが語ったとされる誓いの意義を訴えた。ヒポクラテスの誓いは、現代の医療倫理の根幹を成す患者の生命尊重・健康保護の思想や、専門家としてのモラルと尊厳の保持などを誓うものである。ヴォネガットは、ヒポクラテスの誓いの中で、特に重要視する一節を 1985 年に行われた MIT の講演において、次のように紹介する。「わたしの能力と判断力にしたがい、患者の利益のために養生法をほどこし、患者を苦しめたり、そのほか不正な目的でそれを用いたりはしません。たとえだれに求められても、人の命を絶つような薬を与えないし、またそのような薬を奨めたりもしません」（『死よりも悪い運命』186）。そして、ヴォネガットは次のように、医師だけにとどまらず、あらゆる専門の科学者にとって、このヒポクラテスの誓いの精神は心に留めておくべきものであると述べる。「すべての科学が、人びとに安全で健康な生活を送らせたいという単純な願望をそのルーツに持っていることを思いだせば、医師だけではなく、あらゆる種類の科学者がそこに含まれるように、この誓いを簡単にパラフレーズすることができるでしょう」と続けた（186）。

コロナ禍の米国では、ヒポクラテスの誓いの精神に基づいて、ある医師団が、経済的に豊かではない各国の人々の治療に使用できる、安全で安価なジェネリック薬の多剤併用療法を COVID-19 の治療のために確立し、治療法をウェブ上の非営利の研究サイトでリアルタイムに公表していた。その医師団とは、東バージニア医科大学教授（2020 年 4 月当時）のポール・マリク医師とウィスコンシン大学医学部の客員教授で救命救急サービス部長（2020 年 4 月当時）のピエール・コーリー医師らの率いる救急救命医学領域の医師 10 人が 2020 年 4 月に設立した「新型コロナ救命治療最前線同盟」（Front Line COVID-19 Critical Care Alliance: 以下

FLCCC)である。彼らは、2020年3月には、COVID-19による肺炎症状を呈する患者に「MATH+」と称するプロトコルによる治療を施行して、好成績を収めるようになった。この治療法はソーシャル・メディア上で共有され、世界中の緊急治療医の間に広まり、実践された。その結果、FLCCCの医師らには世界中から問い合わせや感謝のEメールが届くようになった。ジャーナリストのマイケル・カプツォはFLCCCの活動を紹介する記事の中で、それらのメールの一例を紹介している：

親愛なるマリク医師。私ははるかインドのビハール州ムザッファルプル市のものです。この地域の人々は裕福ではなく、高価な治療法は受けられません。とても安いお金で何百もの人々のいのちを救おうと、私はみなさんのMATH+という治療法を全面的に採用しました。政府から与えられた施設は限られたものなので、私が患者のためになんとか用意できたのは、自家製の酸素生成機を使ってなんとか酸素飽和量72%を維持できる部屋と、うつぶせさせることと、そしてMATH+という治療法だけでした。皆さんには感謝の言葉もありません。みなさんが考えられた治療法は、ノーベル賞ものです。ほんとうに言葉にはできないくらい感謝しています。ありがとうございました。ピモハン・クマル医師（カプツォ）

FLCCCのMATH+プロトコルは、高額な新薬による治療や、高度な医療設備にアクセスすることができない各国の人々の助けとなる、安全で廉価な治療法であった。マリク医師はパンデミックの始まった当初から、世界中の発展途上国の恵まれない人々に、治療法やワクチンがなければならぬと考え、誰もがアクセス可能な安価で有効なジェネリック薬を使った治療法の開発を心がけていた（カプツォ）。

大村智によれば、2020年4月に、オーストラリアのモナシュ大学のレオン・カリー博士やカイリー・ワグスタッフ博士のグループが試験管内でのデータで、「イベルメクチンが新型コロナウイルスの増殖を阻害する」(33-34)ということを発表したということである。この研究を受けて、世界各国の医師たちがイベルメクチンをCOVID-19の治療に使い始めた。そして、その結果がツイッターなどソーシャル・メディアを通じて拡散していき、この薬が新型コロナにも使えるという情報が広がったのだという。そして、その後の観察研究やランダム化比較試験などの臨床

試験で、イベルメクチンが新型コロナに有効であるという論文が数多く発表されるようになったとのことである（大村 34）。

大村によれば、「一般には、イベルメクチンはアフリカや南米に多いオンコセルカ症（河川盲目症）やリンパ性フィラリア症（象皮症）など線虫性熱帯病の制御に成功した医薬品として知られており、20年程前よりヒトの腸管糞線虫症や疥癬という特殊な感染症の治療の特効薬として」（4）活用されているとのことである。そして、イベルメクチンが多くの種類のウイルスに対して抗ウイルス作用を示すことが報告されているという（大村 33）。

このような中で、FLCCCの医師らは、世界各国で行われているイベルメクチンの臨床試験の経過を調査・解析した結果、感染早期の患者の外来管理と濃厚接触者の発症予防には、この薬が十分な効果を示すと判断した。FLCCCによると、26件の論文のうち16件がランダム化比較試験を受けており、統計学的に高い有意を示し、イベルメクチンがCOVID-19の治療に効果があることは疑いのないものであるということだった。COVID-19に罹った患者たちは、イベルメクチンを服用すれば、入院せずとも急速に回復が見込まれることがこれらの研究の中で示されていた（カプッツォ）。

FLCCC会長のピエール・コーリー博士は、2020年12月に米国議会上院の国家安全保障・政府問題委員会に証人して召喚され、イベルメクチンのCOVID-19予防と治療に関する世界の試験成績を説明し、米国における早期の適応拡大を求めた。特に、米国NIHが定めた「新型コロナウイルス感染症治療ガイドライン」におけるイベルメクチンの推奨レベルを是正することを求めた。八木澤守正によれば、これを機に米国内でのイベルメクチンの新型コロナに対する適応外の臨床使用は急速に増えたということであり、CDCの報告によるとパンデミック以前の2020年3月ごろまでと比べると、2021年1月には1週間当たりのイベルメクチンの処方件数は10倍以上増加して、同年8月には20倍以上増加している。また、2021年8月のある1週間の新規感染者のうち、9.7%までがイベルメクチンの処方を受けていたということである（八木澤「イベルメクチン論争の虚実」162-163）。

2021年4月下旬には、インドではCOVID-19のデルタ株が猛威を振るい、感染者が急増し、3万人に達そうとしていた。それを受けて、インド保健当局は外出禁止、ソーシャルディスタンス、マスク着用などを徹底、イベルメクチンの使用も許可した。すると5月15日には感染者数が80%近く急落したという（馬場）。FLCCCによると、この時期に、インドでは全インド医科大学（AIIMS）、インド

医学研究評議会（ICMR）が、軽症の COVID-19 患者にイベルメクチン使用を推奨する緊急対応をしたということである（馬場）。2021 年 9 月中旬の時点では、イベルメクチンが新型コロナの治療や発症予防に対して全国的に採用されている国 15 ヶ国、一部地域で使用されている国は 19 ヶ国であった（八木澤「イベルメクチン論争の虚実」111）。また、2023 年 6 月に刊行された著書 *The War on Ivermectin* の中で、FLCCC 会長のピエール・コーリー医師は、当該書籍を執筆中の時点で、c19early.org という匿名の統計学者らと研究者らの運営するウェブサイト上の統計によれば、イベルメクチンの有効性を示す研究は、27 ヶ国から 134,554 人の患者を含む 1,023 人の科学者による 95 の研究があると述べている（169）。

イベルメクチンを新型コロナの治療と発症予防に使用することに対して、向けられた強固な否定論の背景にある、医薬品の研究開発の事情について八木澤は以下のように述べる。

過去数十年間にわたって、世界各国で数十億回の投与が行われたことにより蓄積された安全性に関する信頼と、南米各国では処方箋が不要な一般薬として取り扱われるほどの入手の容易さと廉価さが、新型コロナのワクチンや新規抗ウイルス薬を開発しようとしている巨大製薬会社にとっては、新型コロナへの適応拡大を阻止したい理由になっていると考えられています。

また、世界各国で繰り広げられる医師主導型治験から得られた新型コロナ制御に係るイベルメクチンの有効性の情報が、従来の医薬品の開発研究に比べると正統から外れており、異端と見なされる状況があることも事実です。

従来の抗感染症薬の開発は、探索研究から基礎的活性評価研究（試験管内、動物実験）、薬物動物等の評価、投与方法・投与量の検討、安全性と有効性に関する探索的な臨床研究、検証的な臨床研究という段階を経て得た最終評価成績を、医薬品規制当局に提出して承認審査を受けるという企業主導型の研究開発でした。

通常は数百億円の開発費用と 8~10 年の開発期間がかかるのが一般的とされており、その経費は承認後の売り上げをもって補填するという図式でした。
[……]

今回のコロナ・パンデミックは、緊急使用許可（EUA）という形で全く新規なワクチンやモノクローナル抗体の研究開発を促し、エボラ出血熱の治療薬として開発途上にあったレムデシビルの臨床導入という展開を通じて製薬業界

を著しく活性化しました。

そのような新規抗感染症薬の研究開発に対する製薬業界の活性化が起きている最中に、数十年の使用に基づく安全性が保障されており、廉価なジェネリック品が数多く存在するイベルメクチンが新型コロナの治療薬として注目を集めているのです。

従来は医薬品の開発とは無縁であったような開発途上国における医師主導型で小規模な臨床試験成績が多数提示されて、新型コロナへの適応拡大が求められたとしても、従来の医薬品規制の信念に基づく規制当局としては、簡単に適応拡大の要請に応じられないことも理解はできます。（「イベルメクチン論争の虚実」158-160）

イベルメクチンの COVID-19 に対する有効性については、2023 年 7 月の今日においても、各国で未だに見解が二つに割れている。日本のメディアでは、2022-2023 年には、イベルメクチンの効果に対する期待を込めたものよりも、否定的な姿勢をとる記事の方が目立っている（大西，岩澤）。FLCCC に所属する臨床医らやその他の世界各国の臨床医らの行うメタ分析（SRMA）や小規模なランダム化比較試験（RCT）や観察比較試験（OCT）では有効性が指摘され、各国の資金力のある大規模のランダム化比較試験においては、イベルメクチンの有効性は認められない状態が続いている（Desort-Henin, Kory and McCarthy 225-233, 八木澤「イベルメクチンの COVID-19 臨床試験成績のメタ分析に関する一考察」）。

パンデミック下のケアの危機とアメリカ文化・文学におけるケアの精神

COVID-19 のパンデミックは、世界各国における「ケア」にまつわる政治的課題を浮き彫りにした。ケア・コレクティヴの『ケア宣言—相互依存の政治へ』（2021 年）において、世界各国で COVID 感染拡大の中、社会的弱者と各種ケア・ワーカーの方々が感染の危険性にさらされながら、十分な保護や手当や配慮が当局から得られなかったことが批判されている。

この世界は、ケアを顧みないこと [無関心，無配慮，不注意，ぞんざいさ] が君臨する世界です。コロナウィルスの大感染は、合衆国，イギリス，そしてブラジルといった国々を含む多くの国で，このケアのなさが継続していること

を明るみにただただといてよいかもしれません。これらの国々では、まさにリアルな、差し迫ったパンデミックが襲ってくるというかなり以前からの警告を軽視し、むしろ遠くの、あるいは実際には存在していない脅威に対する大規模な軍備に膨大なお金を無駄に費やし、結果、すでに豊かな人たちにお金を流し込んだのです。このことによって、Covid-19の危険に最も晒されている人々すなわち、医療関係者、ソーシャル・ワーカー、高齢者、健康に不安を抱えている人たち、貧しい人々、受刑者、そして不安定雇用の下にある人たちが受けた支援や援助は、取るに足らないものだということがはっきりしました。

(6)

『ケア宣言』では、このようなケア不足は、パンデミック以前から各国において常態化しており、社会の構造として定着していたことが指摘されている。「パンデミックに襲われるずっと以前から、ケア・サービスはすでに削減され、多くの高齢者や障がい者たちの手に届かない高価なものとなり、病院は恒常的に患者に溢れ、医療崩壊の危機に見舞われ、ホームレスの数は長年増加傾向にあり、食事を取れない生徒たちの対応に追われる学校の数はずっと増えている」(6)ということである。そして、社会福祉が削減される中で、多国籍企業は、介護・介助つき施設などのケア産業への融資や大量の投機から莫大な利益をあげているのだという(6)。

ヴォネガットはヴェトナム戦争の最中の1970年に行われたベントン大学の卒業式での演説の中で、軍事が人間の尊厳を軽視し、破壊するものであるのかを批判する一方で、芸術は人間の尊厳を守ることを強く訴える力があると主張する。ヴォネガットは文学を志す前は、科学に傾倒していたが、科学技術が軍事に転用されることを知り、第2次世界大戦下では、人間を蹂躪し、破壊する戦争のシステムと戦闘の基盤には科学技術があることを目の当たりにして、悲観論者になったと述べる。物事をよくするために何が求められるのか、という問いの答えとして、作家は、初めにトマス・アクイナスの「慈悲の七つの精神的な働き」(『ヴォネガット、大いに語る』(以下『ヴォネガット』) 259)を紹介している。「無知な人にもものを教えてあげること。疑い深い人の相談相手になってあげること。悲しんでいる人を慰めてあげること。罪を犯した人を叱責すること。過ちを犯した人を許してあげること。苦痛を負わせる圧制者に耐え忍ぶこと。そしてあらゆる人々のために祈ること」(『ヴォネガット』 259)。ヴォネガットは続けて、トマス・アクイナスの忠告の「慈悲の七つの肉体的な働き」(『ヴォネガット』 260)を重要なものとして示している。「空

腹の人に食べ物を与えること。のどが渇いた人に飲み物を与えること。裸同然の人に着る物を与えること。宿なしの人に部屋を与えること。病人と捕らわれ人を見舞うこと。人質のために身代金を払ってやること。死者を手厚く葬ってあげること」(『ヴォネガット』260)。ヴォネガットが重視するトマス・アクイナスのこれらの箴言の中に見られる、傷付き、弱っている他者への配慮や、すべての個人を人間として尊重する姿勢は、ケアの倫理論者たちによるケアの定義と重なり合うものである。岡野八代はダニエル・イングスターによるケアの実践の定義を次のように紹介している。「わたしたちが直接的に諸個人を助けるためになすあらゆることと定義されよう。それは、彼女・かれらの命にかかわる生物学的ニーズを満たすこと、彼女たちの基本的な潜在能力を発展させたり、維持したりするために、そして、不必要で、あるいは望ましくない痛みや苦しみを避けたり、緩和したりするためである」(96)。また、岡野は、ケアとは「ケアを必要とする人の生を支えるための身体的な活動だけを指すわけではない」(95)と強調している。つまりケアは、ケアを受ける人がいま何を必要としているのか、あるいはその人の動きや息遣いはどうかを注視するなど、ケア活動をしている瞬間を超える、その人の生の在り方全体を配慮するといった、特定の他者に強く関心を向ける営みを含んでいる」(95)と説明する。ヴォネガットが重視するトマス・アクイナスの「慈悲の七つの精神的な働き」は、特定の他者に関心を向ける、営みとしてのケアであると見ることができ、さらに、「慈悲の七つの肉体的な働き」は活動としてのケアと見なすことができるのではないだろうか。

ヴォネガットに先行して、米国にはアフリカ系アメリカ人の地位向上運動の指導者らや19世紀の奴隷制廃止論者やセツルメント運動家による社会的弱者への配慮の思想がある。W・E・B・デュボイスは『黒人のたましい』(1903年)の中で再建期後に、社会的保護がなく、長時間の苦役、低賃金、幼年労働や高利と詐欺の危険にさらされていたアフリカ系アメリカ人の(元奴隷の)労働者の人々に対する、社会の上層階級に属する人々による温かい共感と心情に基づいた保護と指導の必要性があったことを指摘している(230-231)。1913年には、デュボイスは平和活動の一環で、植民地主義と帝国主義がいかに弱者を搾取し、犠牲にしているかを指摘する。「植民地住民は世界で最も窮乏した人びとであり、90%は十分な識字能力を有せず、極度の貧困に苦しみ、病気の犠牲者になりやすい。植民地住民は今まで利益の源泉とみなされ、世界の民主的発展の恩恵から排除されてきた。3世紀にわたる植民地住民の搾取は、戦争・混乱・苦難の元凶であった」(『平和ための闘い』

31)。このように、初期には自国内のアフリカ系の同胞に向けられていたデュボイスのケアの精神は、思索、執筆、運動が積み重ねられる中で、国外のサバルタンにも向けられることとなった。

1889年に、シカゴのスラム街の中心にセツルメント運動の拠点であるハル・ハウスを開設し、貧しい移民の人々にボランティアで救いの手を差し伸べ、地域の社会改良に尽力したジェイン・アダムズの思想にも、弱い立場にある人々への配慮が顕著である。持病の悪化により叶うことはなかったが、アダムズは大学卒業後、女子医科大学に進学し、医学を学んで貧困者の医療に従事しようと志す。鈴木健二によれば、「アダムズは移民たちの物質的生活を援助したばかりでなく、心の飢えも満たそうとした」という(106)。ハル・ハウスには、教養のある人々が好むようなマホガニーの家具が備え付けられ、花が飾られ、読書会や美術展や音楽会が開かれ、ハル・ハウスは、不運にも貧困から抜け出せなくなった人々に精神的な潤いや喜びを提供した(106)。アダムズとデュボイスは同時代人であり、両者は全米黒人地位向上協会(NAACP)の創設メンバーであり、互いに知的交流があり、二人の社会的弱者に対する姿勢には共通点があった。

公民権運動の指導者のマーティン・ルーサー・キング・ジュニア牧師は、公民権法成立後公民権獲得後は「最も小さい者」である黒人と貧者の人権を求める運動を展開した(黒崎 223)。キング牧師のこうした姿勢を支えたものの一つに、デュボイスの精神もある。デュボイスの死後、彼の生誕100周年を記念したカーネギーホールでの食事会の席でキング牧師は、デュボイスを最も素晴らしい人々の一人であるとその預言者性を称え、デュボイスが時間と手間をかけて南部の黒人が日常的に被っていた虐待と侮辱を明らかにしたことを指摘した。そして、キング牧師はデュボイスこそが近代の社会学、歴史・文学研究の父であるとしながらも、彼のもっとも素晴らしいのはその精神性であるとした。デュボイスが抑圧された人びとに共感をささげ、あらゆる形の不正を甘受しなかったことこそが彼の美德であるとした(Blum 320)。

デュボイスやキング牧師の他にも、19世紀末からアフリカ系アメリカ人に対する白人によるリンチの悪質性を調査報道したアイダ・B・ウェルズや、アフリカ系の人々をターゲットにした収監システムへの反対運動を展開するアンジェラ・デイヴィスといったアフリカ系の活動家・思想家の精神の底流には、一貫して弱き者へのケアの精神があり、それは、同国人であるヴォネガットにも通底していた。FLCCCの医師らは、高額な新薬による治療や、高度な医療設備にアクセスするこ

とができない人々の助けとなる、安全で廉価な治療法をパンデミック初期の頃から共同で追究していた。この医師らの社会的に弱い立場にある患者の人々に対するケアの精神の背景には、アフリカ系アメリカ人の思想家や運動家が米国において打ち立てた、最も弱い立場に追いやられた人々への配慮と慈しみの思想の系譜が、(FLCCCの医師らの中にはアフリカ系の人はいないのであるが、) あるように思われる。

パンデミック、言論の規制、ディストピア

新型コロナのパンデミック下、緊急事態への対応のために、世界各国で民主主義や自由主義に制限がかかったことについては、今後多角的な見地からの精査が求められるであろう。パンデミック下の英語圏の国々においては、各国の大手メディアと情報技術企業が連携し、WHOの方針に従った各国政府のCOVID-19対策とは異なる医学的見解や公衆衛生政策上の主張は、情報規制の対象とされたことを、米国の弁護士のロバート・F・ケネディ・ジュニアとブレット・スワンソンは問題視している(Kennedy Jr. 27-57, Swanson)。このような言論統制により政府の方針に対する異論が封じられることになり、英語圏各国のパンデミック対応に十分に自由主義的な、異論を戦わせるかたちの健全な議論がなされなかったことを、ケネディ・ジュニアは指摘している(27-57)。

ヴォネガットの小説『スローターハウス5』(1969年)は、1973年にノース・ダコタ州ドレイク市の教育委員会により、内容が不健全であると指摘され、焼却された(『パーム・サンデー』15)。ヴォネガットはドレイク市教育委員会への抗議の手紙の中で、いかにその焚書の行為が「善良な市民であり、まさしく現実に生きているひとりの人間」としての彼を傷つけるものであったのかを主張し、書物を憎んで焼き払うような行為は反アメリカ的であり、悪であり、愚劣であるとして批判した(『パーム・サンデー』15-19)。さらにヴォネガットは、1979年に行われたアメリカ市民自由連合の募金集会で、教育委員会による特定の文学作品の学校図書館からの排除は、権利章典でアメリカ人に認められた言論の自由を脅かすものであるとして抗議した(『パーム・サンデー』22-27)。

小説『プレイヤー・ピアノ』(1952年)の中では、言語を用いたディストピア的支配が展開される。第3次世界大戦後の未来社会では、巨大企業の管理者と技術者から成る少数の上層階級が政府よりも権力をふるっており、民主主義が失われてい

る。近未来の寡頭制は、プロパガンダの言語により支えられている。大企業のイリアムの恒例行事では、体制を維持するべく、反抗勢力の過ちを示し、彼らへの支持を失墜させるメッセージを込めた演劇が毎年繰り返し上演される。また、この小説中の社会では「小説家」になって執筆活動するには、事前に「全米美術文芸評議会」の批評とブッククラブへの推薦を受ける必要がある。登場人物の一人の小説家志望の男性は、書き上げた小説の原稿を評議会に提出してブッククラブへの推薦を待ったが、作品が難解に過ぎたためにどのブッククラブからも支持を得ることができず、また、テーマが機械反対であったため、サボタージュを弁護するものと見なされ、評議会の推薦を受けることができなかった。この社会でのブッククラブは、小説の芸術的価値に目を向けることはなく、ただひたすら本を安く確実に多くの読者の元に届けるための効率的な市場調査のためのシステムとして存在している。小説家志望の男性は、社会になじめずについて、「人間がいまどこにいるか、どこへ行こうとしているか、なぜそこに行こうとしているか」（『プレイヤー・ピアノ』428）といった疑問を提出していたために、評議会に却下され、体制に小説家ではなく、「広報活動」を担うようにと指示されることになる。寡頭体制と、作家の自由な想像力とは相矛盾するものとなる。広報活動はこの社会の中では、「マス・コミュニケーションの媒体の中で、重要人物を傷つけることなく、つねに経済および社会の長期安定を第一目標として、議論を呼びそうな問題や制度に関する好意的な世論を、応用心理学を用いて啓発することを専門とした職業」（『プレイヤー・ピアノ』423）とされる。このように、民主主義の失われた社会は言論統制によって維持されるのだと、ヴォネガットは『プレイヤー・ピアノ』の中で示唆している。エイミー・アチソンとショウナ・シェイムズによると、ディストピアの政府はあらゆる方法で情報を統制し、人々が自らの抑圧された状況を把握することを妨げようとする指摘する。検閲は厳格に行われ、ニュースの発信は政府により管理され、一般市民が政府にフィードバックを提供する経路はほとんどないのが、ディストピア下の情報規制であるという（83）。

コロナ・パンデミック下の米国では、感染症対策に関わるメディアやSNS上の議論に対して、メディア組織と情報技術企業による情報規制が行われたことが指摘されている。論文『COVID-19に関する異論の検閲と抑圧：戦略と対抗戦略』の執筆者であるシャー・ラズらはCOVID-19の政策と対策に関する議論を抑制しようとする情報技術企業が、言論規制を行ったことを指摘した。そして、シャー・ラズらによれば、大手の情報技術企業によって検閲されている医師や研究者の多くは、

決して非主流の人々ではないということである。その多くは権威ある大学や病院で働く科学者であり、本を著し、何十、何百もの論文を発表し、その研究が広く引用されている専門家もいて、科学・医学雑誌の編集を担う者や、病棟やクリニックの責任者もいるのだということである。シャー・ラズらは、異論の抑制や検閲の慣行は、言論の自由や倫理原則の侵害、科学に対する弊害、公衆衛生や安全を損ねる可能性など、広範囲に及ぶ影響をもたらすと報告している。

科学的言論に対する検閲や抑圧に関する苦情はパンデミックに先行して存在していたが (Elisha et al. 2021, 2022; Martin), COVID-19 時代の新しい特徴は、Facebook 社や Google 社などの情報技術企業が果たす役割が顕著であることであるとシャー・ラズらは指摘する (Martin)。その顕著な例として、「グレート・バリントン宣言」のウェブサイトが Google 社によって検索時のランキングを下げるように設定されたことが挙げられると、シャー・ラズらは述べる (Myers)。ハーバード大学、スタンフォード大学、オックスフォード大学の 3 人の疫学者が中心となり、2020 年 10 月に発表された「グレート・バリントン宣言」の宣言文 (Kulldorff et al.) には、ノーベル賞受賞者のマイケル・レヴィットをはじめ、10 月 20 日の時点で、4 万人を超える科学者や医師が賛意を示し、署名していた。この宣言は、この時期に州政府のレベルで感染拡大のレベルに応じて行われるようになっていたロックダウン (都市封鎖) が、公衆衛生や、雇用・教育に悪影響をもたらすことから、高齢者など重症化しやすい人々を保護しつつも、それ以外の人々は通常通りの生活を送ることで集団免疫の獲得を目指す、というものである。このグレート・バリントン宣言の露出を減らすために、Google 社は検索アルゴリズムを変更したのだという (Myers)。2021 年 2 月、Facebook 社は宣言に関わった科学者のグループが立ち上げたページを削除した (Rankovic)。2021 年 4 月、YouTube 社は、フロリダ州知事ロン・デサンティスとグレート・バリントン宣言の執筆者が登場した、パンデミックに関する公式公聴会の動画を削除した (Shir-Raz)。こうして、4 万人もの世界中の科学者と医者警鐘を鳴らす声に、制限がかけられたのだった。

おわりに

COVID-19 の感染対策のためにこのパンデミック 3 年間に、世界各国でかつてないほどに、高度な医学や公衆衛生学の専門知識が求められた。そして、それらの専門知識に基づいた感染対策は社会や人びとの生活や人間関係のあり様を大きく変

えるほどの影響力をふるった。パンデミック開始から3年経過し、社会や人びとや経済に多大な影響を与えて感染対策が展開される過程で、米国では大手メディアと大手ITプラットフォーム企業によって感染症対策にまつわる言論が規制されていたことが明らかになり、論争を呼んでいる。感染拡大を抑制するために、迅速な政策の決定と実施が求められる中であっても、社会的な議論の広がりがコントロールされたことの問題を指摘する声は少なくない。本稿では、アメリカ文化・文学の主要テーマと、コロナ禍における社会的議論の論点との共通点を探ることにより、人文学的な視点からパンデミックの危機の輪郭を浮かび上がらせることを試みた。この取り組みを通して、テクノロジーやテクノクラシーにより人びとが傷つけられることのないように警鐘を鳴らすヴォネガットや大江、そして、社会的弱者に対するケアの精神に満ちたデュボイス、アダムズ、キング牧師、ウェルズやデイヴィスの著作物は、パンデミックと、ケアと民主主義、自由主義の危機の時代に読み直すことを求められるキャンオンであることが確認された。

註

1. 中山悟視によれば、「ヴォネガットは幼少期からの科学への信頼を原子爆弾によって喪失した後、自らを取りまくテクノロジーとそのあり方を描くことで、未来への警鐘を鳴らし続けることとなった」(128)ということである。中山はヴォネガットによる批判の手法や矛先を、以下のようにまとめている：「機械による効率化による人間の尊厳の喪失、テクノロジーを利用した高度な社会管理システムによる抑圧、軍事技術の発展にみられる道徳心の欠如、人間的な感情が無視され、果ては人間が不要になること、といった具合だ」(128)。

引用文献

- Atchison, Amy L. and Shauna L. Shames. *Survive and Resist: The Definitive Guide to Dystopian Politics*. New York: Columbia U P, 2019.
- Blum, Edward J. *W. E. B. Du Bois, American Prophet*. Philadelphia: U of Pennsylvania P, 2007.
- Capuzzo, Michael. "The Drug that Cracked COVID." *Mountain Home Magazine*, 1 May 2012. <https://www.mountainhomemag.com/2021/05/01/356270/the-drug-that-cracked-covid>. Accessed 3 July 2023. 寺島メソッド翻訳グループ翻訳「イベルメクチン。COVIDを駆逐した医薬品。」『寺島メソッド翻訳NEWS』<http://tmmethod.blog.fc2.com/blog-entry-607.html>. Web. 2021年7月20日。2023年7月3日閲覧。
- Care Collective. *The Care Manifesto*. London and New York: Verso Books, 2020. 岡野八代, 富岡薫, 武田宏子訳『ケア宣言：相互依存の政治へ』大月書店, 2021年。

- Desert-Henin et al. "The SAIVE Trial, Post-Exposure Use of Ivermectin in Covid-19 Prevention: Efficacy and Safety Results." Preprint. Web. 5 January 2023. <https://www.medincell.com/wp-content/uploads/2023/04/Poster-SAIVE-April2023-OK3.pdf>. Accessed 7 July 2023.
- Du Bois, William Edward Burghardt. *The Souls of Black Folk*. Mosaic Books. 2021. Kindle. Originally published in 1903. 木島始, 鮫島重俊, 黄寅秀訳『黒人のたましい』岩波書店, 1992年。
- . *In Battle for Peace*. New York: Masses and Mainstream, 1952. 本田量久訳『平和のための闘い』ハーベスト社, 2018年。
- Elisha, Ety, et al. "Retraction of Scientific Papers: The Case of Vaccine Research." *Critical Public Health*. 2021. <https://doi.org/10.1080/09581596.2021.1878109>. Accessed 7 July 2023.
- Elisha, Ety, et al. "Suppressing Scientific Discourse on Vaccines? Self-perceptions of Researchers and Practitioners." *HEC Forum*. 2022. <https://doi.org/10.1007/s10730-022-09479-7>. Web. Accessed 7 July 2023.
- FLCCC Alliance. "The Totality of Evidence." *FLCCC Alliance*. <https://covid19criticalcare.com/treatment-protocols/totality-of-evidence/>. Web. Accessed 3 July 2023.
- Kennedy Jr., Robert F. *Letters to Liberals: Censorship and COVID: An Attack on Science and American Ideals*. New York: Skyhorse Publishing, 2022. Kindle.
- Kory, Pierre and Jenna McCarthy. *The War on Ivermectin: The Medicine that Saved Millions and Could Have Ended the Pandemic*. New York: Skyhorse Publishing, 2023. Kindle.
- Kulldorff, Martin, et al. 2020. *Great Barrington Declaration*. <https://gbdeclaration.org>. Accessed 10 July 2023.
- Martin, Brian. 2015. "On the Suppression of Vaccination Dissent." *Science and Engineering Ethics* 21 (1): 143-157.
- Myers, Fraser. 2020. "Why Has Google Censored the Great Barrington Declaration?" *Spiked*, 12 October. <https://www.spiked-online.com/2020/10/12/why-has-google-censored-the-great-barrington-declaration/>. Web. Accessed 10 July 2023.
- Rankovic, Didi. 2021. "Facebook Deletes Epidemiologists Behind the Great Barrington Declaration." *Reclaim the Net*, February 8. <https://reclaimthenet.org/facebook-deletes-epidemiologists-behind-the-great-barrington-declaration/>. Web. Accessed 10 July 2023.
- Shir-Raz, Y., et al. "Censorship and Suppression of Covid-19 Heterodoxy: Tactics and Counter-Tactics." *Minerva*, 2022. <https://doi.org/10.1007/s11024-022-09479-4>. Web. Accessed 10 July 2023.
- Swanson, Bret. "Covid Censorship Proved to Be Deadly." *Wall Street Journal*. 7 July, 2023. Accessed 10 July 2023. https://www.wsj.com/articles/covid-censorship-proved-to-be-deadly-social-media-government-pandemic-health-697c32c4?reflink=desktopwebshare_permalink
- Vonnegut, Kurt. *Fates Worse than Death*. New York: Vintage Classics, 2013. Originally published in 1991. 浅倉久志訳『死よりも悪い運命』早川書房, 2008年。

- . *Palm Sunday.: An Autobiographical Collage*. New York: The Dial Press, 2009. Originally published in 1981. Kindle. 飛田茂雄訳『パーム・サンデー——自伝的コラージュ』早川書房, 2009年。Kindle版。
- . *Player Piano*. New York: Vintage Classics, 2022. Originally published in 1952. 浅倉久志訳『プレイヤー・ピアノ』早川書房, 1985年。
- . *Wampeters, Foma & Granfalloon: (Opinions)*. New York: The Dial Press, 2020. Originally published in 1974. Kindle. 飛田茂雄訳『ヴォネガット, 大いに語る』早川書房, 1988年。
- 岩澤倫彦「日本発の薬」が新型コロナに効く? —— 医師すら“イベルメクチン神話”を信じてしまった2つの理由 患者300人に投与した医師, 個人輸入して過剰服用する人も」『プレジデントオンライン』2023年7月8日。https://president.jp/articles/-/71211. Web. 2023年7月11日閲覧。
- 大江健三郎「^{アムビグユアス}あいまいな日本の私」『あいまいな日本の私』岩波新書, 岩波書店, 1991年。1-17頁。
- . 「癒される者」『あいまいな日本の私』岩波新書, 岩波書店, 1991年。17-34頁。
- 大西まお「未だにイベルメクチンが効くと考える人がいる訳」『東洋経済オンライン』2022年11月8日。2023年7月3日閲覧。
- 大村智「古くて新しいイベルメクチン物語」『イベルメクチン——新型コロナ治療の救世主になり得るのか』大村智編著, 河出書房新社, 2021年。Kindle版。13-44頁。
- 岡野八代「ケア/ジェンダー/民主主義」『世界』2022年1月号, 岩波書店, 2022年。92頁-106頁。
- カート・ヴォネガット, 大江健三郎「テクノロジー文明と『無垢(イノセンス)』の精神(対談)」『現代作家ガイド6 カート・ヴォネガット』巽孝之監修, 伊藤優子編著, 彩流社, 2012年。60-80頁。
- 黒崎真『マーティン・ルーサー・キング——非暴力の闘士』岩波書店, 2018年。Kindle版。
- 鈴木健二「スラムの改革」『資料で読むアメリカ文化史3——都市産業社会の到来1860年代-1910年代』佐々木隆・大井浩二編著東京大学出版会, 2006年。105-117頁。
- 中山悟祝「テクノロジーへの反発」『現代作家ガイド6 カート・ヴォネガット』巽孝之監修, 伊藤優子編著, 彩流社, 2012年。123-132頁。
- 馬場錬成「コロナ患者が急増したインドでイベルメクチンをめぐり論争——使用に慎重なWHO幹部を弁護士会が「告発」する騒ぎに」『論座』https://webronza.asahi.com/science/articles/2021061500004.html. Web. 2021年6月18日。2023年7月3日閲覧。
- 八木澤守正「イベルメクチンのCOVID-19臨床試験成績のメタ分析に関する一考察」『学校法人北里研究所 北里大学 大村智記念研究所 感染制御研究所北里研究センター・感染創薬学講座』https://kitasato-infection-control.info/swfu/d/ivermectin_20211227.pdf. Web. 2021年12月25日。2023年7月3日閲覧。
- . 「イベルメクチン論争の虚実」『イベルメクチン——新型コロナ治療の救世主になり得るのか』大村智編著, 河出書房新社, 2021年。Kindle版。110-164頁。